

ぼくが生まれる前の絵画で、戦争とか闘いとかが描かれている絵にとっても興味があります。

明治時代では(西郷隆盛の)西南戦争の絵、江戸時代では忠臣蔵(討ち入り)の絵、またそれ以前では(源義経の)壇の浦の絵とか。

しかしそれらはまだおとなしいほうで、阿鼻叫喚(あびきょうかん)の凄まじい絵もたくさんあります。

そういう種類の絵をいっぱい観てきて感じるのは、闘っている人間の顔も姿も様子も、おばけに見えることです。

これらはぼくらが日常知っている、普通の平凡な人間ではない。

狂気じみて血なまぐさく、人間はやっぱり動物なんだと、いやおうなく再認識させられます。

おばけに見えるどころか、こういう人間たちを古来から人びとは「おばけ」と呼んでいたのかもしれない。

また、こういう絵にとっても興味があるということは、ぼく自身が狂気じみて血なまぐさいところを、如実(によじつ)にもっているという証拠かもしれない。

いずれにしても戦争や闘いの状況が、おばけを発生させるとなると、現代でも未来でも、世界に戦争とか闘いとかがあるうちは、おばけがまだまだいくらでもでてくるということです。

そうしておばけの登場を、心の底の底で心待ちにしているぼくは、残念ながらすくなくとも平和主義者であろうはずがありません。

けれどももし仮に、おばけと平和と〈二者択一〉をなささいといわれれば、地団駄(じだんだ)ふみながらも、むろんぼくは平和を選択します。

そうしてほんとうに世界に平和がくるのなら、おばけの話はやめることにします。

そうしてもうひとつつきたいのは、おばけは狂気じみて血なまぐさいのみならず、ときとして聖なる姿で現れるということです。

そうしてその聖なるおばけは、ほんものの聖なるものなのか、まがいものの不聖なるものなのか、簡単には判別できないことです。

その判別は凡なる人びとにはできるはずもなく、長い長い歴史のなかで解明されるのを待つほかはありません。

そして解明されたとき、ほんものの聖なるものが、じつは聖なるおばけで、まがいものの不聖なるものが、じつは俗なる人間であるということがすくなくあります。

だから人間はおばけと同様、いやそれ以上に厄介で不可解で怖いのです。

## + 5 1 【おばけじぞう】

「おばけは、いくらでもおるのう」

べつだん、うんざりしたわけでもなく、そういいました。

つづけて、こうききました。

「おばけのせかいは、ひろいのう、たのしいのう、こわいのう、おそろしいのう。さても、なぜにこう、ひろいんじゃろうか。それに」

懐爺は答を用意していたのかもしれない。

ぼくの問いが終わる前から口を開きます。

「人間の世界が広ければ広いほど、おばけの世界も広いのです。人間の世界が深ければ深いほど、おばけの世界も深いんです」

「それは、なぜかのう」

「はい。人間に頭があるから、角のある鬼が生まれます。人間に髪があるから、蛇のおばけが発生します。人間に足があるから、足のない幽霊が出てきます。人間に美醜があるから、美しいおばけや醜いおばけが登場します。(こらあ、ながくなりそうじゃ、とぼくはおもいます) 人間に火や水や木や土が必要ですから、火のおばけ水のおばけ木のおばけ土のおばけが出没します。人間に」

「もうええ。にんげんは、じじいや、ばばあになるから、【こなきじじい】や、【あかまんば】がおるんじゃろ」

「はあ、まあ」

「にんげんは、むやみに、じぞうをつくるから、【おばけじぞう】がいる

んじゃな」

「はあ、まあ」

「そうじゃ、かいじい。わしは、【おばけじぞう】のはなしをききたいのう。なぜかというに、わしは、じぞうがすきだからじゃ。それに【おばけじぞう】いうたら、でっかいというはなしじゃからのう。じぞうがだいぶつに、なっちまわないか、しんぱいでのう」

「はあ、まあ」

「はあ、まあ、じゃねえ。さっさとほなさんかい」

「なんか、やくざにおどかさされているきぶん。金ちゃんこのごろ、口がわるくなってやしませんか。【おばけじぞう】の話などよりも、お地蔵さんに、口をなおしてもらったほうがいいですよ」

懐爺に叱られたのは久しぶり、というか、初めてかもしれない。

「すまんのう。わしはおばけのはなしになると、くちがおかしくなるんじゃ。だども、あたまはおかしくないからのう」

「それはわかっています。でも金ちゃん、わたしは、老婆心（ろうばしん）ながら、この世からおばけがいなくなった時代の、金ちゃんを心配するのです」

「そらあ、わしもしんぱいじゃのう」

懐爺に合わせてそういいましたが、ぼくは心配なんかしていません。

いざとなったら、自分でおばけを作り出せばいい、とおもっていたからです。

「村はずれに酒屋さんがありますよね。あそこにいつもお酒を買いにくる美女がいましてね。酒屋さんのあるじの酒井さんが、気になって気になってしかたがない。それである夜に後をつけましたらね、地蔵さんの裏でふいに消えてしまいました。何度後をつけても、地蔵さんの裏で消える。さて、どうしてでしょう」

「そらあ、そのびじょが、じぞうさんだったからじゃ」

「いい線いっていますね。でも実は、その美女は、お寺の住職さんの、隠し妻だったということです。その地蔵さんの足元に、お寺まで続く穴があったというわけです」

「つまらん、はなしじゃのう。【おばけじぞう】と、なんのかんけいがあるんじゃ」

「まあその、坊さんが、奥さんもったり、お酒のんだり、まあその、好まれなかった時代、戦前の話ですが、お地蔵さんが、助けたという、つまりその」

「そいつは、【おぼけじぞう】じゃのうて、【おたすけじぞう】じゃろう」

「すみませんねえ。このごろわたしは、耳が遠くなってしまって」

「べんかいは、いらん。かいじいに、にあわん。そんなひまあったら、さっさとほなさんかい」

「すみません、やくざの金ちゃん。さてと、あのその、これも戦前の、もしかすると江戸時代の話なんですが」

と、懐爺が語る【おぼけじぞう】の話はこういうことです。

権八（ごんぱち）という、悪名高き強盗がいて、その権八がこの村に流れてきた。

ある夕刻、躑躅峠（つつじとうげ）で、人を殺して財布を奪って、ふと気配をかんじて、ふりかえるとお地蔵さん。

「おい、くそ地蔵、見たな」

権八がお地蔵さんにむかっていうと、

「見た見た、見たがわるいか」

とお地蔵さんがいった。

権八すこしも驚かず、

「見たはゆるす。だが喋ったらゆるさん」

嚇（おど）した。

するとお地蔵さんは、

「おれは喋らん。おまえが喋る」

といったものだ。

「くそ地蔵め。なにをほざくか」

権八は莫迦にしたが、数日して、大酒のんで酔っぱらった権八は、みんなの前で自分のいままでの悪業（あくぎょう）を、自慢たらたらにかたっぱしから喋ってしまった。

後悔してもおそい。

権八は捕まって、獄門（ごくもん）に処せられた。

このときのお地蔵さんを【おぼけじぞう】とよんで、みんなは怖れ、

かつ敬った。

「なんじゃ。【おぼけじぞう】は、でっかいじぞうじゃないんか。しゃべるじぞうなんか」

ぼくがつまらなそうにいうと、

「躑躅峠にいまもある、あのお地蔵さんが【おぼけじぞう】です。先日は、金ちゃんのことを、あれこれ喋っていました」

おしゃべり地蔵め。

【おぼけじぞう】よりも、【おしゃべりじぞう】という名のほうが、似合うんじゃないか。

小学校の井戸に小便したことか、村長さんの家の庭でうんこしたことか、隣のお姉さんの入浴を覗き見したことか、それとも。

ぼくがいくらきいても、懐爺は笑って教えてくれませんでした。

あれはぜんぶ、たまたまだ。

いくら弁解しても信じてもらえないだろうが。